

# 「次」が来たら

被災3原発のいま

穏やかな波を立てる海に向こう岸に、クリーム色の巨大な壁がそびえる。その周りでクレーンや大型タンクがせわしなく動いていた。宮城県東側、ノコギリの刃のように地形が入り組んだ牡鹿半島にある東北電力女川原発（同県女川町、石巻市）。約七百里離れた漁港に立った元女川町議の高野博さん（68）は「いっくら高い防潮堤造ったって、これで大丈夫、なんて思ったら大間違い。おっきな自然の力さ勝たねっちゃん」とつぶやく。

## 女川

十年前の東日本大震災で、この原発も高さ三メートルの大津波が押し寄せた。敷地の高さは海拔二・三・八メートルでぎりぎりだった。その敷地を踏まえ、東北電力が現在、海拔二九メートルの高さの防潮堤を建設中だ。津波の威力は、今も、住民の記憶に鮮明だ。漁港を散歩していた男性も「海を眺め「はら、このでっかい」

# 自然の力さ勝たねっちゃん

## 防潮堤新設しても不安拭えず



東北電力女川原発の危険性を指摘する高野博さん

は優等生扱いされた。ただ、無傷だったわけではない。地震の揺れで高圧電源盤がショートし火災が起きた。冷却用海水を取り込むポンプ室が水没し、原子炉付近の熱交換器が浸

東北電力女川原発 1、3号機がおり、原子炉の型式はいずれも福島第一と同じ「沸騰水型軽水炉」。1984、2002年に営業運転を開始。東日本大震災時、ともに運転・起動中だったが自動停止した。1号機は18年10月に廃炉にする方針を決定。2号機は13年12月、震災で被災した原発では初めて、新規規制基準への適合性審査を申請。20年2月に「適合」と認められた。3号機も審査申請に向けて準備中。安全対策として海拔25メートルの高さの津波を想定し、同29メートルの防潮堤を建設している。

水 核燃料の冷却に必要な五系統の外部電源のうち、四系統が使用不能になった。つまり、女川も福島第一と紙、重の危機に遭ったのだ。港に泊まる小型漁船の修理をしていく男性も「建設中の「壁」に信頼を寄せた。山に沿って走る道路は細く、くねくねと折れ曲がる。山の斜面にコンクリートで補強されていない部分もたくさんある。原発の裏を走るそんな一本道を行き、原発出入り口のゲートを通過。さらに奥へ車を進めた。向かった先は牡鹿半島東端の石巻市奇麗地区。奇麗から原発までは直線距離で約二・五キロ。この集落から半島の付け根にある市街地へ抜ける道は一本だけだ。もし、福島のような事故が起きたら、放射能が漏れ出る原発に向かって避難をするという究極の矛盾を強いられる。

## 過去何度も 三陸に津波

もろろん、十年前は奇襲も大きな津波に襲われた。気象庁のセンサーが設置されておらず、市の防災担当者は「津波の高さが分からない」と言いが、住民は「二十、三十メートルまで水が来た」と口々に言う。ホタテやホヤの養殖をする漁師の渡辺淳さん（56）は当時、漁港そばの自宅にいた。揺れがおさまり、外に出ると、潮が「一気に引いて、港の内側に渦巻きができていた。これは津波が来るな」。渡辺さんは漁船に乗って沖へ向かった。津波も乗り越え、海の上で一日半を過ごした。

「港のあの頑丈な防潮堤あるでしょ。あれも全部、津波でひっくり返った。どんなに丈夫な防潮堤でも、いずれ壊されっぺ。人の造るものは、海の力、自然の力さ、かなわない」

女川原発がある三陸地方は、過去に何度も大津波に見舞われている。平安時代の貞観津波（八六九年）に、明治三陸津波（一八九六年）、昭和三陸津波（一九三三年）、南米チリで起きた地震津波（六〇〇年）も地球の裏側から押し寄せ、多くの人々が亡くなった。

# 避難方向へ矛盾 原発時

5〜30分間は屋内退避

## 「被ばく前提」の計画

もし、「次」が来て、原発事故も重なったらどうする。渡辺さんは「夜は船出せないし、原発はすぐそばで、被ばくするしかない」と話す。

高城原の避難計画によれば、原発から半径五キロ圏内を中心とした三千人は、原子炉に問題が起きたらすぐに逃げる。一方、五〜三十キロ圏の十九万五千人は当面、自宅や近くの建物に屋内退避する。一旦避難すると大渋滞が発生するからだ。が、その場合、避難するまでに五日以上かかるという。だが、そんなに待ってられないのか。

県原子力安全対策課の下閉氏は「渋滞が起きれば、むしろ余計に被ばくする。屋内の方が被ばくを抑えられるのか」



1 原発周辺に掘り曲がった道路が延々と続く。2 石巻市の奇麗海岸。山の裏側に原発がある。3 有刺鉄線が張り巡らされた女川原発のゲート。いずれも宮城県石巻市で



えられると伝えてほしいがない」と言いが、市民団体「女川原発の避難計画を考える会」の原田雄さん（60）は「石巻市」は「被ばくするの前提のこんな計画、住民をばかにするにもほどがある」と憤る。

仮に、屋内退避したとしても、津波が来れば道路が壊れたり、がれきで埋もれたりするのは、先の震災で実証済みだ。「内閣府の文書では、屋内退避は屋外と比べて、被ばく線量が二割しか低減されない。そもそも地震で家は壊れている可能性があるが高い。この避難計画はまったく実効性がなく、それにもかかわらず、女川原発を再稼働させようという動きは近年、加速している。立地自治体の県と石巻、女川の両市は、県民投票を求め多くの住民の声を無視し、昨年十一月に女川原発の再稼働に同意。東北電力は二九メートルの防潮堤を含めた安全対策工事が完了する二〇二二年度以降、早期の再稼働を目指す。そこには、十年前から一基も再稼働していない東日本の原発の復活を期待する原発推進側の思惑も透ける。だが、原発に向かって逃

## 自治体は再稼働推進 住民の声を無視

### トクモ

被災から三月後の女川町に取材に行った。海沿いの道は壊滅。あちこちで陥没したり崩落したり。山道から下って漁港に出ると、岸壁が数十メートルに「でっかい」コンクリートで陸上。トトラボットが上陸し、転がっているを見た。これほど自然の脅威を、原発も一度感じているのだろうか。（歩）